

「家がいいね」 第233号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2023. 10. 3



玉城の森からの汁谷川の流れそれが本来潤している田も稲が刈られ、秋本番。遠くに度会の峰が見えている。電源風車が増え、近づくとも山全体液晶。パネルという光景もあるそつだ。原発が公然と再稼働する世の流れと合わせ、チグハグに思う。果たして、我々は本気で、温暖化が著しい地球の現状に向き合って、進んでいるのだろうか。

家で死ぬことを、じっくりと考える

8月に出版された本を勧められ読んでみました。一人暮らしの頑固な父の老いる日々、遠距離から介護の娘が、とことん付き合わされる体験です。私の身近の在宅でも同様のケースが多く、つい読みふけてしまいました。よく似たタイトルで「病院で死ぬということ」山崎章郎（1990年）があります。この30年、病院で命を巡る形は変わりました。癌を嘘の病名で隠すことが無くなって、挿管だらけ・心肺蘇生の最期も少なくなりました。しかし、短期間での退院を求められます。戻るべき家は一人暮らしが当たり前、支える力の枯渇が心配です。最期を自宅まで訪問する医師は5%と、著者の記載があり同感です。地域情報的大事です。もつと肝腎は、死ぬことは誰にでも初めての経験になります。覚悟を決めたとしても、家族共々で長い道のりを歩くことになるでしょう。



命の終わり、その場所はどこがいいですか

住み慣れた自宅で、幸せな最期を迎えるために、親子の絆を深め、3年間の遠距離看護取り体験記。

文藝春秋刊 定価1760円（本体1600円＋税10%）

「聞き書き」を身近に広げています

聞き書きで百歳の地元の方の話を聞いています。今まで人前では話さなかった満州での戦争体験、戦後のシベリア抑留で、目の前で死んでいった人達のこと。自分自身生きて戻れるとは思えなかったため、重い口の戦後を、今まで過ごしてこられました。

このまま話さないと無かったことにされてしまうとの感慨です。終戦時も沢山の歴史事実が焼却されてしまいました。記録を隠滅させる政権の下で、今や8割が戦前に戻ったようです。

水脈の果て 炎天の墓碑を 置きて去る

金子兜太さんは、挫けず戦後を詠み続けました。



クリニックは変わりつつあります

7月から女性スタッフが順次に、加わっています。まずはお話をきかせてという気持ちでいますので、ご相談の時間を大切に今後ますますまいります。自己紹介はそれぞれから、お聞きくださいね。



外来の臨時休診のお知らせ

研究会のため休診です。

10月28日（土）、

11月24日（金）、

11月25日（土）

も同様に休診します。在宅の患者さんには、この間も対応します。



自宅での人生を 最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<https://isezaitaku.com>



→バックナンバー閲覧可